

第一部 実在と非実在のポエジー—フェルナンド・ペソーアの原初的ポエジー

文学運動〈サウドジズモ〉とポルトガルのあり方

ペソーアがその文学生活のなかでさまざまな知的領域から広く影響を受けていることとはよく知られている。そしてその影響のなかで最初の、もっとも大きなもののひとつが1910年5月に無血革命により樹立されたポルトガル第一次共和制期（1925年まで継続）において多大な影響力と支持とを獲得した文学運動〈サウドジズモ Saudosismo（以下、サウドジズモと表記）〉（1912-1932年頃まで）からのものであったこともまた広く知られている。

ペソーアが1912年から1914年まで所属するこの文学運動は、詩人テイシェイラ・デ・パスコアイス Teixeira de Pascoaes(1877-1952)、哲学者レオナルド・コインブラ Leonardo Coimbra(1883-1936)、作家で歴史家のジャイメ・コルテザオン Jaime Cortesão(1884-1960)、思想家ラウル・プロエンサ Raul Proença(1884-1941)、軍人でありながら作家活動にも積極的であったアウグスト・カジミーロ Augusto Casimiro(1889-1967)といった当時のポルトガルを代表する知識人が、ポルトガル第二の都市ポルトにおいて1912年に創設した文学運動であるとともに、1910年に創設された文化グループ〈ポルトガル・ルネッサンス Renascença Portuguesa〉（1910-1932年頃まで）の文学領域を担った運動でもある。

サウドジズモが母体としたポルトガル・ルネッサンスは、その創設者のひとりであるコルテザオンの言を借りれば、「共和制改革に刷新と豊かな内実を付与する」³ことを目的とする文化啓蒙グループであり、その目的は多様な思想背景を有するこの文化グループのメンバーによる政治参加、人文科学等の諸分野の書物の刊行、機関誌『鷲 A Águia』への寄稿、講演活動等を介して積極的に果たされていく。

ただしこのグループの意義は、それが第一共和制の知的領域に彩りを加えたことだけにあるのではなく、ポルトガルが近代あるいはヨーロッパにどのように向かい合うのかを提起したことにもある。同グループの名称である「ポルトガル・ルネッサンス」という語は、ポルトガル語では“Renascença Portuguesa”と表記する。これは文字通り「ポルトガルの再生」を意味するが、この「再生」の本質は、なによりもヨーロッパにおけるポルトガルのあり方としての「再生」をつよく含意している。ポルトガルにとって「近代（化）」とはヨーロッパからの不可避な脅威とそれに対応する条件と方途の模索であり、第一共和制はポルトガルが「近代のポルトガル」と「ポルトガルの近代化」のはざまに「国家」としてのあり方（そしてそれは、当然のことながら「国民」としてのあり方とも密接に結びついている）を自国の内部と外部に示すことを要請された「場」であった⁴。この「近代のポルト

³ Gama: 186.

⁴ ポルトガルが「近代世界」における自己のあり方を模索する契機は、その歴史においていくつもみられるであろうが、第一共和制期樹立に先立つ20年前にイギリスによりつけつけられた「最後通牒」はポルトガルが自らのあり方を再考するのに大きなインパクトを与えた出来事であった。ブラジルを失い、それに代わる資源確保のためにヨーロッパの列強と並びアフリカをバラ色に染めようと企図したポルトガルにたいし突きつけられたこの政治判断は、ポルトガルを歯噛みさせるだけではなく、1640年以降ポルトガルの

ガル」と「ポルトガルの近代化」という枠組は、ポルトガルがポルトガル化して、つまりナショナルな「自立して個別に在る」態度で「近代世界」に対峙するのか、あるいは、近代化して、つまりヨーロッパ化して「普遍にしてヨーロッパの一員として在る」という態度を以って対峙するのか、というポルトガルの構えの謂いである⁵。この「近代のポルトガル」と「ポルトガルの近代化」という矛盾あるいは齟齬を身に纏ったオルタナティブな問いが尖鋭化したのがポルトガル第一共和制であり、このような時代状況の下で誕生したポルトガル・ルネッサンスは、「近代世界」におけるポルトガルのあり方がどうあるべきなのか、つまりポルトガルが個として在るべきなのか、あるいは普遍に在るべきなのか、を「共和制改革に刷新と豊かな内実を付与する」ために克服すべき問いとして問わなければならなかったのである。

このオルタナティブな問いは、ポルトガル・ルネッサンス内部に決定的な対立をもたらすこととなる。この対立は、「近代のポルトガル」の側に立ったパスコアイスと「ポルトガルの近代化」の側に立ったポルトガルの思想家アントニオ・セルジオ António Sérgio(1883-1969)とのあいだに、「サウドジズモ論争」⁶と呼ばれる、グループを二分する激しい応酬を引き起こした⁷。この問いが同グループにとって決定的であったことは、同論争後、セルジオやプロエンサ等「ポルトガルの〈近代化〉」側のメンバーが同グループを脱退し、思想グループ〈セアラ・ノーヴァ Seara Nova〉をあらたに立ち上げ、「ポルトガルの〈近代化〉」の啓蒙を推し進め、一方、パスコアイス等「〈近代〉のポルトガル」側のメンバーがポルトガルのナショナルなあり方を啓蒙するための運動としてサウドジズムを規定し、この方向でポルトガル・ルネッサンスの目的を改変していったことにある。

〈サウドジズモ〉のロマン主義的基調

かくして、ポルトガル・ルネッサンス内部での政治力を増していったサウドジズモの文人たちであるが、かれらは、ほとんど例外なくロマン主義思想に依拠した。ポルトガルのロマン主義は、十九世紀前半にアルメイダ・ガレット Almeida Garrett(1799-1854)、フェリシアノ・デ・カスティーリョ Feliciano de Castilho(1800-1875)、アレシヤンドレ・エルクラノ Alexandre Herculano(1810-1877)を嚆矢としてその緒が開かれ、十九世紀中葉にカミーロ・カステロ・ブランコ Camilo Castelo Branco(1825-1890)、ジョアン・デ・デウス João de Deus(1830-1896)、ジュリオ・ディニス Júlio Dinis (ジョアキン・ギリェルメ・ゴメス・コエーリ

歴史に鎮座し歴史的課題となってきたイギリスとの依存と従属の関係を再度つよく意識させることとなった。第一共和制にとってこの出来事が大きなインパクトをもつのはまた、この「最後通牒」が共和主義者にとって旧体制への攻撃材料となったと同時に共和主義者自身が旧体制の背負っていたイギリスとの関係を担わざるを得なくなったこと、さらに、「近代世界」においてポルトガルは「個として在る」のか「普遍として在る」のか、つまり「ポルトガルとして在る」のか「ヨーロッパとして在るのか」という問いを再度呈示したからである。

⁵ 拙稿、「サウドジズモ運動とポルトガルのあり方」、東京外国語大学博士前期課程論文、2001年。

⁶ Gama: 186.

⁷ FS: 21-123.

ヨ Joaquim Guilherme Gomes Coelho の筆名) (1839-1871)等の作家たちによりそれぞれ独自の解釈の下で展開されたのち、第一共和制期においてサウドジズモの詩人や作家たちによりあらたな発展を遂げることとなる。

ロマン主義を一様に定義することにはつねに困難が伴うが、サウドジズモが見出し依拠したロマン主義思想の基本的態度が啓蒙主義から実証主義へと繋がる一連の思想変遷への対抗であったことは間違いない。ジョン・スチュアート・ミルが指摘したように、ロマン主義は啓蒙主義の思想とその射程の「狭さ」⁸への反動として、文学、哲学、神学、自然科学、歴史思想、政治思想へとその思想射程を拡大し、ヨーロッパ思想のあらたな基盤となったが、サウドジズモも同様にポルトガルにおいて単なる文学の領域を超え、多くの知の領域を包摂し律する思想運動となった。

また、啓蒙主義思想が世界を光でくまなく照らし出すことを求めたのとは異なり、ロマン主義思想は「夜」へのまなざしを重要視したが、サウドジズモも光で満ち溢れた世界には照らし出されないものへのまなざしを肝要な要素として自らの思想核とした。さらにこのロマン主義の「複数性」(アーサー・ラヴジョイ)と「夜が教えてくれた無限の眼」(ノヴァーリス)の蠢く世界は、啓蒙主義思想や実証主義が求めた理性を基とする不変不動の明瞭で分析的な美でなく、感情(情緒)と想像力を重視する内面的で主観的かつ動的なものとしての美の創造を強く求めた。さらにまた、ロマン主義思想は、「世紀の病」(ゲーテ)と揶揄されもしたが、人間の不安、苦悩、憂鬱な魂を積極的に描写し、過去あるいは中世的なもの、異国、隠れたものへの憧憬を抱く人間の姿を表象しもした。サウドジズモの文人たちは、この情緒的な思考態度を引き継ぎ、主観に沿った内面的で感情的なこころのあり様と此処ではないどこかを思慕し求める情緒を作品化することを試みた。

サウダーデと〈サウドジズモ〉

理性的で実証主義的な思想への対抗要素としてのロマン主義思想を受け継いだサウドジズモは、概ね三期に分けることのできるその活動期間においてテイシェイラ・デ・パスコアイス(第一期)、レオナルド・コインブラ(第二期)、アルヴァロ・ピント Álvaro Pinto (1889-1957)(第三期)といった知的指導者の牽引により、積極的に第一共和制下のポルトガルと関わっていく。そしていずれの時期においても同運動の基本的理論は、ポルトガルの文学史において新ロマン主義の詩人と分類されることの多いパスコアイスが理論化した情緒「サウダーデ S Saudade」をその理論基部に据えていた。

情緒もまた意識現象であるならば、情緒とは、ある対象への態度や価値づけの意識(志向性)ということになるが、サウダーデという情緒は、本来、個人の願望(願い)と記憶(思い出)を基本的な構成要素とする意識現象であり、この情緒を有する者は過去の記憶

⁸ ウィリアム・ブレイク(1757-1827)が『ニュートン』のなかに描いた薄暗い海底でコンパスをもちいて物質世界の測量をおこなうニュートンの姿絵は何よりも啓蒙主義思想の「狭さ」を描写している。

のなかに残る人や物、時間や空間を現在に取り戻したいとする願いを有し、その願いのなかで苦悩してきた。

パスコアイスがサウドジズモの理論にもちいる以前、すでにサウダーデは、ポルトガルの文学領域ではポルトガル中世抒情詩集 *Cancioneiro* 以降、哲学的省察においてはドン・ドゥアルテの『忠実な顧問官 *Leal Conselheiro*』第25章「心痛、嫌気、不愉快、不機嫌そしてスイダーデについて“Do Nojo, Pesar, Desprazer, Avorrecimento e Suidade”」(1420)以降、幾世紀にも亘ってきわめてポルトガルの意識現象として省察された背景をもっている⁹。またこの情緒はのちに、パスコアイスと親交のあったスペインの思想家ミゲル・デ・ウナムーノの思想に少なくない影響を与えただけでなく、ポルトガル亡命時のオルテガ・イ・ガセットに「サウダーデについての仮説 神話学研究“Hipóteses a la Saudade un estudio de mitlogía”」、*「サウダーデに関する仮説“Hipótesis a o de la saudade”*」の諸論稿を書く動機を与え、さらに1950年代にはガリシアのハモン・ピニェイロ等が担ったガリシア・ナショナリズムの理論的骨子となったように¹⁰、スペイン思想においても考察され、単なるポルトガルの意識現象あるいは文学的モチーフという意味合いを超えた思索対象として論じられてきた。

このような趨勢を経たサウダーデが、パスコアイスにとってつねにポエジーの恒常的着想であったことをポルトガルのパスコアイス研究者、ジョルジェ・コウティーニョ Jorge Coutinho(1939-)が著書『テイシェイラ・デ・パスコアイスの思想 *O pensamento de Teixeira de Pascoaes*』(1995)のなかで明確に指摘している¹¹。事実、『萌芽 *Embriões*』(1895)、『いつまでも *Sempre*』(1898)、『禁断の地 *Terra Proibida*』(1900)、『あてどなく *À Ventura*』(1901)、『イエスとパン *Jesus e Pan*』(1903)、『光に向かって *Para a Luz*』(1904)、『至純なる生 *Vida Eetérea*』(1906)、『マラスヌ *Marânus*』(1911)、『天国への回帰 *Regresso ao Paraíso*』(1912)等の作品はサウダーデの情緒で満ち溢れ、サウダーデの詩人と呼ばれるパスコアイスのポエジーにとってこの情緒が欠くことのできない詩想であることを知らせている。

だがパスコアイスがサウダーデと結びつけられるのは、この詩人がこの情緒を恒久的な詩のモチーフとして設定し、さまざまな詩的表現をもちいて詩化してみせたからだけではない。それはこの詩人がサウダーデを政治利用したからである。この情緒の政治的な利用に際し、パスコアイスはそれまでサウダーデがもつことのなかった、あるいはその含意をはっきりと指摘されることのなかった諸要素をこの情緒に付し、それを明確化している。

⁹ ポルトガルの思想家アントニオ・ブラーシュ・テイシェイラ António Braz Teixeira(1936-)が自著『神、悪、そしてサウダーデ *Deus, Mal e Saudade*』(1993)や『サウダーデの哲学 *A Filosofia da Saudade*』(2006)においてサウダーデの変遷について要を得た解説をおこなっている。さらに、言語学者カロリーナ・ミカエリス・デ・ヴァスコンセロス Carolina Michaëlis de Vasconcelos(1851-1925)の『ポルトガルのサウダーデ *A Saudade Portuguesa*』(1996)、ポルトガルの思想家アフォンソ・ボテリョ Afonso Botelho(1919-1996)の“D. Duarte e a fenomenologia da saudade”, および“Saudosismo como Movimento” (in FS, 293-306, 686-693.)等の論考がサウダーデの変遷を明瞭に論じている。

¹⁰ FS: 421-442.

¹¹ コウティーニョのこの書物は、パスコアイスについて論じられた考察のなかでもっとも精緻なもののひとつである。

この概念付与の内実を要約すれば、「ポルトガル魂」という共同性、「セバスティアニズモ *sebastianismo*」という神話性¹²、「パガニズムとキリスト教の本能的溶解」により生成される宗教性、過去（＝記憶）を未来（＝願望）に投企する時間性、そして「民族の固有な精神的血」という民族性といった要素である¹³。

このサウダーデへの概念付与は、「国民国家」という歴史的かつ社会的な組織原理の構築のための操作と考えることが可能であるし、あるいは政治と芸術とのあいだに親和性を見るとともにそれらを不可分なものとして理論化し実践してきたロマン主義思想の要請であったとも判断することもできる。だが、いずれにしても、それまで省察され詩化されてきたサウダーデという情緒にパスコアイスほど政治的かつ社会的な形象を与えた者はいない。サウダーデへの概念付与を介してパスコアイスは、ポルトガルの「国家」、「国民」、「社会」を構想し、この意図的な概念付与をされた情緒を基軸とすることでポルトガル人がヨーロッパおよび近代世界においてポルトガル人であることができると積極的に啓蒙したのであり、サウダーデをポルトガル人がポルトガル人であるため、ポルトガルが「近代世界」において「ヨーロッパ文明へ再び何かしらのものを付与」¹⁴し、その存在を確かなものとするための拠り所とし、サウドジズモがつねに依拠することの可能なカノンとした。

このサウダーデ理論はまた、哲学理論〈クリアシオニズモ *Criacinismo*〉によりポルトガル哲学にあらたな知のパラダイムを開き、また二十世紀ポルトガルの哲学の最大の潮流のひとつであるポルト学派を創立し、さらには1912年および1922年から23年のポルトガル教育相であった哲学者レオナルド・コインブラに積極的に支持されたことにより¹⁵、その理論的強化を可能とし、文学と哲学との親和的關係をその理論に組み入れることに成功し、その影響力をさらに増していった。

ポルトガルへの帰国

サウドジズモがポルトガルの第一共和制の勃興にしたがい単なる文学運動という枠を超えて、その趨勢を政治および社会領域に伸張させる数年前の1905年、（アソーレス諸島のテルセイラ島における家族との数カ月の休暇滞在を含むものの）8歳から17歳までダーバ

¹² 若くして王位に就き、モロッコ攻略の最中に行方不明となった16代ポルトガル王ドン・セバスティアン(1554-1578)に纏わるメシア思想。1580年にスペインによって併合されたポルトガルを憂う者たちは、このセバスティアン王がいつの日かスペインの支配からポルトガルを解放し、ポルトガルを再興してくれると信じた。ただし、この王の遺体は17世紀にスペイン経由でポルトガルへ返還され同国で埋葬されたというのが歴史の見解である。

¹³ パスコアイスのサウダーデ論について扱った研究書は数多くあるが、とりわけ、ジャシント・ド・ブラド・コエリョ Jacinto do Prado Coelho(1920-1984)の *A Poesia de Teixeira de Pascoaes e outros escritos pascoaesianos*(1999)、ルイーザ・ボルジェス Luísa Borges(1962-)の *O Lugar de Pascoaes Epifanias Da Saudade Revelada*(2005)、パウロ・ボルジェス Paulo Borges(1959-)の *Princípio e Manifestação Metafísica e Teologia da origem em Teixeira de Pascoaes I, II*(2008)および *O Jogo do Mundo Ensaio sobre Teixeira de Pascoaes e Fernando Pessoa*(2008)といった研究書は、先のコウティニーニョの研究書と同様に秀逸である。

¹⁴ FS: 21.

¹⁵ *ibidem*, 161-198.

ンで暮らしてきたペソアは1904年、ケープ大学の入学を辞去し、ドイツ船ヘルツォック Herzog 号に乗り、10年ぶりの定住のためリスボンに帰国した。

1893年に実父ジョアキン・デ・セアブラ・ペソアを結核で亡くしたのち、1895年に母マダレーナが在ダーバン領事ジョアン・ミゲル・ローザ司令官と再婚したのを機に1896年以降、ペソアは家族とともにダーバンに移り住んでいた。ペソアにポルトガルにおいて教育を受けさせようと考え、かれをリスボンに残そうと考えていた母マダレーナへ向けて「ぼくの大好きなお母さん/ここポルトガルにぼくはいます/ぼくが生まれた土地々に/どんなにぼくがこれらの土地を好きになろうとも/ぼくはあなたのことが一番好きなのです À minha querida mamã/Eis-me aqui em Portugal/Nas terras onde eu nasci/Por muito que goste delas/Ainda gosto mais de ti」¹⁶と綴りダーバン行きを詩によって懇願したペソアにとって南アフリカでの月日は、母の愛を独占することは叶わなかったものの、この詩人の気質の形成に無関係ではない多くの出来事を経験させた¹⁷。それはたとえば、異父兄弟エンリケッタ・マダレーナ、マダレーナ・エンリケッタ、ルイス・ミゲル、ジョアン・マリア、マリア・クララの誕生とマダレーナ・エンリケッタ¹⁸の早世、アイルランド・カトリック系のミッションスクール・ウエスト・ストーリー修道院、およびダーバンハイスクールでの英語教育、商業学校での会計および商取引の就学、ディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ *Pickwick Paper*』への熱中、ポルトガル人詩人の作品への接近、ペソアがラテン語および英文学へ傾注するのに大きな影響を与えたダーバンハイスクール校長W.H.ニコラスとの出会い、英仏の文学および哲学への傾倒、英語で詩を書くこと、ポルトガル語で詩を書くこと、ケープ大学の合格とその試験の際に書いた英語のエッセイが「ヴィクトリア女王記念賞」(応募者899人)に選ばれたこと、最初の異名heterónimoである「虚の騎士 Chevalier de Pas」の誕生、異名アレクサンダー・サーチ Alexander Searchの誕生、異名ロバート・エイノン Robert Anonの出現等々である¹⁹。

ポルトガルへの帰国後、ペソアは、母方の叔母アニタの家や継父の叔父エンリケ・ローザの家にやっかいになりながら、リスボン文学高等学校(リスボン大学文学部の前身)に通いショーペンハウアーやニーチェなどに傾注するも、授業に満足できずにいた。またイギリスの文化圏での生活を送っていたペソアはつねに自分がポルトガル人であるのか外国人であるのかに悩み、それを家族に打ち明けるも相手にされず、孤独を感じる日々のなか、イギリス留学を夢見、ギリシアおよびドイツ哲学や、ポルトガル人作家、ボードレール、ミルトン、ホイットマンの作品世界に閉じこもることが多くなった。鬱々とした日々のなか、1907年、反ジョアン・フランコ政権の学生集会に参加したのち、ペソアは同学校に通うのをやめる。学業を放棄したこの年、独身を貫いた叔母リタ・シャヴィエール・

¹⁶ Pais (a): 16.

¹⁷ cf. Simões: 287.

¹⁸ マリア・クララも1906年没。

¹⁹ OFPa: 13-30. なお、異名アレクサンダー・サーチは「扉 *The Door*」(1906年3月/1907年10月)、および「とても独創的な夕食 *A Very Original Dinner*」(1907年6月)という話の作者である。

ピニエイロ、寡婦のマリア・シャヴィエールそして痴呆の祖母ディオネージオが同居する家に下宿していたペソーアは、父方の祖母ディオネージオが死去したことでわずかではあるが遺産を手にした。精神障害の発作をたびたび起こし、入退院を繰り返す、家では夜な夜な奇声をあげペソーアを慄かせていた祖母からの遺産を手にしたことで独立する機会を得たペソーアはリスボンの「グローリア通り 4 番にある質素で日の当たらない地上階の部屋」²⁰に住むことにした。遺産を元手にポルトガルの小都市ポルタレグレで購入した植字機をリスボンに運びこみ印刷会社イビスをコンセイサオン・ダ・グローリア通り 38 番および 40 番の地に設立したペソーアではあったが、数ヶ月後にはこの会社を倒産させてしまう。その後、1908 年、カルモ広場 18 番一階の貸部屋に住むようになったペソーアは生涯の職となる貿易会社の商業文翻訳者の職を得る。

商業文翻訳業で糊口をしのぐようになったペソーアは、同年よりポルトガル人作家の作品への興味を強くするようになる。その契機のひとつは叔父のエンリケ・ローザとの出会いにあった。リスボンでの生活のなかでペソーアがもっとも親しみをもって接することのできた家族のひとりだったエンリケ・ローザは、1850 年生まれの技師兼軍人であり、技術者として 1876 年から 1881 年までアンゴラでの公共事業、とりわけ、橋の建設などのインフラ事業に携わった人物であったが、病気を理由に退役してからは、慢性的な疾患に苦しみながらも、詩作に耽る日々を送っていた。ペソーアがポルトガルに帰国したときにはすでに年齢 60 に近く、リスボンのリオデジャネイロ通りに独り住んでいたこの叔父はまた、ペソーアがはじめて知己を得たポルトガルの詩人であり、ペソーアがポルトガルの詩人を読むきっかけを与えた導き手でもあった。

ペソーアは、エンリケを介してガレット、アンテロー・デ・ケンタル Antero de Quental(1842-1891)、ゲラ・ジュンケイロ Guerra Junqueiro(1850-1923)、ゴメス・レアル Gomes Leal(1848-1921)、アントニオ・ノブレ、セザーリオ・ヴェルデ Cesário Verde(1855-1886)、カミーロ・ペサーニャといったポルトガル詩人の作品を読むようになり、と同時に、1909 年にはこれらの詩人たちの多くが意識的あるいは無意識的に影響されたフランスの象徴主義やその原型となったボードレール、あるいはポーの作品に傾倒するようになった。ペソーアはまた、ポルトガルの文人たちの集うカフェに叔父に連れられたたび顔を出し、叔父の傍らで当時の文人たちの語る文学論や詩論に耳を傾け、さらには、叔父のもとに通ってきた詩人や作家たちを通してポルトガルの文学の動きを身近に感じることもできた²¹。

祖国としてのポルトガル語

叔父を介してのポルトガルの文学世界との接触が動機のひとつとなったのであろう、

²⁰ Simões: 106.

²¹ ペソーアがエンリケを詩人としても評価していたことは、ペソーアがこの叔父の詩を、雑誌『オルフェウ Orpheu』(第 3 号)に掲載しようと試みたことや雑誌『アテネ Athena』に掲載したこと、アンソロジーを編纂する意図があったことから知れる。

1910年前後のペソアはポルトガルを自分の居場所であると決め、「間接文化^{クオットゥーラリフレクサ}で独創性のない、小国」²²であるポルトガルの状況を刷新し、此国が世界にあらたなルシタニア文明²³を創造するために従事することを自身の使命として語るようになった。また、その使命感からくるものなのであろうか、数年前には英国行きを望んでいたバイリンガルのこのポルトガル人青年は、1911年、1頁700レアルの翻訳料という実入りの良い、世界の詩人と散文家の作品のアンソロジー編纂のためのポルトガル語翻訳の仕事に依頼され英国に招かれるも、これを辞去しポルトガルに残る選択をしている²⁴。

このポルトガルへの傾倒はまた、ポルトガル語を詩と散文の言語として採用するこの詩人のあり様にもあらわれている。1905年にポルトガルに帰国した際、ペソアは作品を書くとき主として英語で考え、英語で書いていた。そのペソアがポルトガル語で作品を書くことを決めたのは、エンリケの導きによりポルトガル文学を本格的に読みはじめた1908年頃であり、その直接の契機はガレットの作品『実のない花 *Flores sem Fruto*』(1845)と『落ち葉 *Folhas Caídas*』(1853)を読んだからである。友人であり、のちにポルトガル初のモダニズム雑誌『オルフェウ』(1915)に参加することになる、ポルトガルの詩人アルマンド・コレテス・ロドリゲス(1891-1971)宛ての書簡のなかでペソアは、はっきりと「『実のない花』と『落ち葉』を読むことで生じた、突然の衝撃のなかで、ぼくはポルトガル語で詩を書きはじめた」²⁵と綴っている。ポルトガルにロマン主義を導入した文人のひとりであるガレットのいささか奇妙なこれらの詩から、ペソアは自らが陥ったアイデンティティのあいまいさを払拭する積極的なモチーフを読み取ったのかもしれない。

ペソアのポルトガル語への傾斜についてポルトガルの思想家エドゥアルド・ロウレンソ(1923-)が以下のように述べている。

はやくからふたつの言語、ふたつの文化の寸断の、ポルトガル人でありながらひとつのイギリス魂を、そしてイギリス人にならないためのひとつのポルトガル魂を創りださねばならない法に従わされ、とりわけ、これらを分化する隔たりに住みそして埋める義務を負い、内側と外側から、だが同じ方途ではなく、自己を認識するようになった（そしてわれわれを誰もがしないように認識するようになる）。次第にかれの唯一の祖国は (...)「ポルトガル語」になっていった²⁶。

ロウレンソがここで述べる「かれの唯一の祖国は (...)『ポルトガル語』になっていった」という表現は、ペソアが自らの思想や情緒にもっとも近似する異名として（異名に関しては第二部で詳しく見ることにしよう）「半異名 *semi-heterónimo*」と呼んだベルナルド・ソアレス Bernardo Soares が『不安の書 *Livro do Desassossego*』(1982)のなかに綴った「ぼ

²² Simões: 147.

²³ ルシタニアとはポルトガルのことを指す。

²⁴ Simões: 149.

²⁵ OFPc: 1422.

²⁶ Lourenço (a): 156.

くはなんら政治的あるいは社会的な情緒をもってはいません。けれど、ある意味、ぼくは気高い愛国の情を有しています。ぼくの祖国はポルトガル語です」²⁷という言葉に依拠したものであろう。いずれにしても、のちに半異名であるソアレスを通じてポルトガル語を自らの言葉、詩の言葉として選び、祖国と規定することを語るペソアのポルトガルへのまなざしは、言葉を存在の宿る場として認識し、言葉において存在者を捉えるという意味において、ハイデガーに先立ち自身の「存在 Ser」を言葉、民族の言葉にアイデンティファイさせる試みであったと言えるのかもしれない。

あたらしいポルトガルのポエジー

自己の拠り所をポルトガルに見出し、自己をアイデンティファイする言語としてポルトガル語を選択したペソアは、ポルトガルに戻ってから8年後の1912年、文学運動サウドジズモに参加し、同年、詩論「社会学的に考察されるあたらしいポルトガルのポエジー *A nova Poesia Portuguesa sociologicamente considerada* (以下、「社会学的考察」と表記。)」(1912年4月、『鷲』4号)によって評論家としてポルトガルの文芸世界に登場する。そしてこの論稿がポルトガル・ルネッサンスの機関誌『鷲 *Águia*』に発表されてから数ヶ月のあいだにペソアは、「再考するならば *Reincidindo* (以下、「再考」と表記。)」(1912年5月、5号)および「あたらしいポルトガルのポエジー その心理学的側面について *A nova Poesia Portuguesa no seu aspecto psicológico* (以下、「心理学的側面」と表記。)」(1912年9月、11月、12月、9号【1章から3章】、11号【4章および5章】、12号【6章から8章】)というあたらしいポルトガルのポエジーに関する諸論稿を続けざまに発表し同誌に掲載する²⁸。

ペソアがこれらの論稿のなかで論じるのは、主として文学運動サウドジズモに焦点をあてて論じられる現行のポルトガルのポエジーのあり方とあり様についての詩(学)論である。ただし、これらの論稿に書かれたあたらしいポルトガルのポエジーの諸相の中心的なモチーフは、換言すれば、ポルトガルのナショナルなアイデンティティの創造の希求にあり、単なるポルトガルの文学を「あたらしさ」という観点で論考した詩(学)論に終始

²⁷ OFPb: 573. なお、同作品は、ペソアの生前に、12編発表されている。1913年に『鷲 *Águia*』誌(4号)に掲載された断章「忘我の森にて *Na Floresta do Alheamento*」が最初に発表され、その後、1929年に *Solução Editor* 社刊行雑誌に二編の断章、1930年に『プレゼンサ *Presença*』誌(27号)に一篇の断章、1931年に『デスコプリメントス *Descobrimientos*』誌[創刊号]に5つの断章、1932年に『プレゼンサ』誌[34号]、『レヴォルサオン *Revolução*』誌、『レヴィスタ・エディトリアル *Revista Editorial*』誌に断章が一篇ずつ掲載された。詩人の死後、『メンサージェン *Mensagem*』誌に「正気日記 *Diário Lúcido*」の題目の付いた一篇の断章が発表されたのち、1960年に10の断章が出版社 *Aguilar* 版全集に収められ、1961年に『不安の書 作品選 *Livro do Desassossego. Páginas Escolhidas*』のかたちでそれまでに発表されたすべての断章が採録された。1961年から1982年にかけてアッティカ社により19の未発表の断章が公にされるとともに、1982年に『バルナルド・ソアレスによる不安の書 *Livro do Desassossego por Bernardo Soares*』のタイトルの付された二巻本が刊行された。

²⁸ のちの1941年に『オクシデント *Occidente*』誌に所収され、「あたらしいポルトガルのポエジー *Nova Poesia Portuguesa*」と題されまとめられるかたちで1944年にアルヴァロ・リベイロ(1905-1981)の序文付きで再所収されることとなる。

するものではない。また、この希求をポエジーに見出そうとするペソアアの様子は、自己の依拠する場を詩の言葉とその創造に探し求めるという意味において、ポルトガル語を祖国と定め、自身の存在をポルトガル語に委ねるそのまなざしと隔たっていない。さらにペソアアがあたらしいポルトガルのポエジーをパスコアイスのサウダーデの思想とそのポエジーであるサウドジズモ思想とポエジーに依拠したかたちで呈示したことは、ペソアアにとって、サウドジズモがあたらしいポルトガルのポエジーと呼応する思想であるとみなされたことを示している²⁹。さらにまた、あたらしいポルトガルのポエジーのあり方とあり様につきサウドジズモの思想とポエジーを軸に分析したペソアアのこれらの諸論稿は、この文学運動とその思想とポエジーがどのような解釈のもとでペソアアに受容されたのかを示すとともに同時代的な時間と空間を共有したペソアアとパスコアイスのサウドジズモに係る思想とポエジーとの交差（とはいえ、両詩人はこの思想とポエジーの方向性において根本的な違いも目立つが、それはのちに取り上げよう）と共振とをあらわしており、と同時にポルトガル語を祖国と規定するペソアアの思想がどのようにあたらしいポルトガルのポエジーおよびパスコアイスのサウドジズモと結びつき展開され、結論付けられているのかをはっきりと示している。

第一部では、ペソアアが論じたあたらしいポルトガルのポエジーがどのようなポエジーであるのかを辿りながらこの詩人の思想の原初形態を確認し、このポエジーがどのように詩として昇華されたのかをいくつかの詩作品を具体的に分析することであきらかにしてみたいと思う。

第一章 あたらしいポルトガルのポエジーの開く詩的次元

1. 文明と創造のポエジー

のちに「あたらしいポルトガルのポエジー」に関する論文としてまとめられることとなるペソアアの文学活動初期の三つの論稿は、1912年4月に上梓された「社会的に考察されるポルトガルのポエジー」を第一論稿とする。

同論稿において、ペソアアは第一共和制期のポルトガルの文学潮流を自身の特異な解釈をほどこしたヨーロッパ文学史のなかに組み入れ「社会的」に分析し、その歴史的正当性を呈示することを試みる。その検討に際してペソアアがまずおこなったのは、文学潮流と社会状態との関係およびこの関係における文学の意義の闡明であった。

²⁹ たしかに、ペソアアとパスコアイスの直接的な交友は、ペソアア側から送付された私信と言えるような書簡があるくらいで、同じ文学運動に所属していた二人の詩人の交友が相互的のものであったのか否かを具体的に知ることは叶わず、また、のちにペソアアはサウドジズモと決別することとなる。だが、ペソアアにしる、パスコアイスにしる、視点の違いはあるものの、第一共和制期のポルトガルのあり方をナショナルな方向へ導こうとしたことはあきらかである。